『デイジー・ミラー』にみる人間関係

On Human Communication through *Daisy Miller* by Henry James

岡　田　慶　子

I．序　論

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、多くの作品を世に発表しながら、大西洋両岸で活躍したアメリカの小説家ヘンリー・ジェイムズ（1843〜1916）は、スウェーデンボルグの熱心な信棒者であった父親の独特な教育方針により、ニューヨークに生まれたが、幼少の頃からアメリカ本国はもとよりヨーロッパ各地で教育を受けた。それゆえ、ひとたび作家としての人生を歩み始めると、当時の成長期のアメリカにおける文化の貧弱さを良しとせず、その拠点をヨーロッパに移し、最終的には死の一年前に市民権を取得し、イギリス国民としてこの世を去る。

この作家は、その生涯をイギリスを中心とするヨーロッパとアメリカの狭間の中で模索し続けたのである。彼の名を一躍有名にしたのは1878年に発表された中編小説『デイジー・ミラー』であった。母親と９歳程の弟と三人でヨーロッパに滞在している美しいアメリカ娘が、その天真爛漫な行動で旧世界に幾つかの波紋を起こしていく物語である。当時のヨーロッパにとっては、未知のアメリカ娘にスポットが当てられたことで、作品の完成度と共に、その題材の新奇さゆえに注目を集め、「デイジー・ミラー帽」が出現するほどの騒ぎとなった。(1) 後にジェイムズは好むと好まざるとに拘わらず、『デイジー・ミラー』の著者として紹介されることが多くなる。放縦なアメリカ娘のイメージをヨーロッパに植え付けたということで、当然のごとく批判もあったが、この後も作家のテーマとして大きな柱となる旧世界と新世界の狭間で揺れ動く人間の葛藤を描くという、所謂「国際テーマ」の雛型の一つがここに見られ、ジェイムズ特有の難解さがまだ見受けられない初期の興味深い作品になっている。

当時のアメリカは、私たちが今知っている超大国のアメリカではない。世界レベルでは歴史が浅く、それゆえの文化の不毛さは否めないが、大きな未知の可能性を秘めた国であった。そういう風土だからこそ生まれたのがジェイムズの特異性である。植民地時代からアーヴィングを始めとしてジェームズに至るまで、アメリカ文学の大きな特質の中には常に対ヨーロッパ意識がある。文化の貧弱さを嘆く声が常にあったのである。19世紀に入り国として成長への道を歩んでくると、当然のことながら、自国の文化、文学も発展してくる。しかし、それでもなおヨーロッパに向ける眼差しは熱い。19世紀後半ともなると、富を手にした成功者たちは、更なる品位を求めてヨーロッパに向かう。そうしたアメリカ人によるヨーロッパ社交集団が存在した時代である。金銭的には余裕が生じているものの、文化的には劣等感を拭い去れない。そしてヨーロッパの模倣に走る。所謂「お上

おかだけいこ：外国語学部英米語学科　非常勤講師

品な伝統」である。それは、大いなる繁栄をほしいままにし、世界の舞台に胸を張って踊り出た第一次大戦後の時代に、戦後に襲った既成の価値観への喪失感から本国に帰還しようとはせずにヨーロッパを彷徨った、あのヘミングウェイを始めとするロストジェネレーションの世代たちとは違う種類の expatriate なのである。

今回は、欧米、新旧の狭間の中で揺れ動く人間模様の物語を、私たちにとっても身近な人間同士のコミュニケーションに焦点を当てて、作品の中で徹底されている一個人の視点の中で展開する目前の相互関係の検証を行う。個人の「眼」を通して見えてくる状況が非常に偏狭で主観的なものであり、一時の感情がいとも簡単に他者に対する評価を左右してしまう過程を考察し、現代における日常のコミュニケーションへの手がかりを探りたい。

II. 遭 遇

スイスの小さな町ヴヴェーの非常に快適なホテルで、それは起こる。この地には富裕なアメリカ人たちが季節の良い時に多く訪れるが、この町はどこかアメリカ本国のリゾート地を思い起こさせる。背景がアメリカを感じさせながらも、そこにはロシア人やポーランド人といった、本国では馴染みのない顔立ちをしたヨーロッパ人たちが闊歩している。一瞬故郷にいる錯覚を起こさせる景色の中に、到る所に配置されているヨーロッパ人を見ることで、ふと我に返る、という不可思議な感覚が沸き起こってくる。ホテルとそれを取り巻く風景の俯瞰という長い導入段落の中に、物語全体の枠組みが提示されているのである。

ウィンターボーンという青年は、ヨーロッパに長く滞在しているアメリカ人の一人である。20代後半の彼は、まだどっぷりとヨーロッパ社会（正確にはヨーロッパにあるアメリカ人社会）に埋没してはいない。彼自身がヨーロッパに留まっている理由は、周囲の伝聞の情報だけがあるのみで明確に説明されておらず、そこにはある種の不可解さが仄めかされている。彼は、ヨーロッパの生活に大いに満足していると説明されていながらも、その中のアメリカ人社交界からは一定の距離感を保ち、その排他的な空気に対しては批判の姿勢も持っている様子である。この人物が作品の中の一貫した視点となり、読者はこのウィンターボーンの視点を通してのみ、物語の状況を体験するのである。——Moreover, slight as it is, “Daisy Miller” is an excellent example of James’s most important technical device: the restricted point of view. Throughout, the reader sees events through the eyes of Winterbourne, a young American living abroad with no clearly defined purpose. (2)

> ... ジェイムズは小説を一人の人物の視界と経験の範囲に極限することによって、作品にかつてない効果的で美しい統一を与えた。ジェイムズの小説の一つの特徴は、「視点」の設定にある。ジェイムズはこの視点の方法をとりあげ、その視点を作品の中に登場する人物の「眼」に置いた。つまりジェイムズは小説の技法として、その視点を登場人物の眼に固定させたのである。視点の方法の導入によりジェイムズは「主人公の内面を外面同様に、客観的に描写する手段を発見した。それにより、作者は事件から独立して、また他者との交渉の場以外の孤独の瞬

間での、その人物の内面を描くことが可能になった」(3)

このホテルに滞在中の伯母コステロ夫人を訪ねてジュネーヴからやってきたウィンターボーンは、頭痛持ちの彼女を残して一人、冒頭の風景の中で時を過ごしている。ホテルでコーヒーを飲む彼の元に、元気な一人の男の子の闖入者がある。テーブルの砂糖を欲しがる少年は、その独特な発音で新世界の息吹をウィンターボーンにもたらす。キャンデーを所望して止まないランドルフ少年は、アメリカの実用主義の申し子であり、アメリカこそが最高であると確信している。ヨーロッパを擁護する立場のウィンターボーンは、そのあまりに純粋なアメリカ肯定の前にたじろぎを覚える。目前の小さな自信家と同じ年頃に彼もヨーロッパに連れて来られたのだが、当時の自分の感情をもはや思い出すことはできない。

ジェイムズは、晩年、自分の作品の訂正補筆を行っているが、『デイジー・ミラー』について、この二人の遭遇の場面を検証してみると、

...“I can't get any candy here---any American candy. American candy's the best candy.”

“And are American little boys the best little boys?” asked Winterbourne.

“I don't know. I'm an American boy.” said the child.

“I see you are one of the best!” laughed Winterbourne.

“Are you an American man?” pursued this vivacious infant. And then, on Winterbourne's affirmative reply--- “American men are the best!” he declared. (4)

という箇所が以下のように変更されている。

...“I can't get any candy here---any American candy. American candy's the best candy.”

“And are American little boys the best little boys?” Winterbourne asked.

“I don't know. *I'm* an American boy,” said the child.

“I see you're one of the best!” the young man laughed.

“Are you an American man?” pursued this vivacious infant. And then on his friend's affirmative reply---“American men are the best,” he declared with assurance. (5)

この少年は、'American' という語を繰り返し自信を持って使用している。'American'と名のつくものは、男でもキャンデーでも「最高だ」と言うのだ。改訂版では、'*I'm* an American boy.' 「僕はアメリカの男の子」の部分が口調によって強調され、その発話後の二人のやりとりの説明から「ウィンターボーン」の固有名詞が消える。それによって、主体はあくまでも少年側にあり、最後にdeclare（宣言するように言う）にwith assurance（自信を持って）とさらに明言することで、少年の揺るぎない自信がますます強調され、対照的にウィンターボーン側のアイデンティティに対する不安定さが読者に示唆されることになる。ただし、この少年は「アメリカ」という言葉には絶対的な信頼を寄せているが、自分自身とすぐ後に登場する美しい姉デイジーという具体的な個人については不確かで、「最高だ」とは断言できない公平さを持ち合わせていることは興味深い。

そして、デイジーの非常な美貌にウィンターボーンは心を奪われてしまう。ここから、デイジー

に対する——そして自分自身に対する——ウィンターボーンの心の葛藤が始まるのである。

--- a pretty American girl coming and standing in front of you in a garden. This pretty American girl, however, on hearing Winterbourne's observation, simply glanced at him; she then turned her head and looked over the parapet, at the lake and the opposite mountains. He wondered whether he had gone too far; but he decided that he must advance farther, rather than retreat.

という箇所においても、

--- a pretty American girl coming to stand in front of you in a garden with all the confidence in life. This pretty American girl, whatever that might prove, on hearing Winterbourne's observation, simply glanced at him; she then turned her head and looked over the parapet, at the lake and the opposite mountains. He wondered whether he had gone too far; but he decided that he must gallantly advance rather than retreat.

と後に加筆しているように、アメリカ側の自信を強調し、久しぶりに真にアメリカ的なもの、彼にとっては既に未知になってしまったものとの遭遇に一種の当惑を覚えている姿を際立たせている。彼が、「カルヴィン派の小中心地であるジュネーヴに子供の頃から愛着を抱いていた」と説明されているのは、その心情的ルーツがやはりアメリカにあることを示唆しているのであろうが、初対面であるにも拘わらず、デイジーはアメリカの無垢、無邪気さを象徴するかのように臆することなく実に開放的である。彼女は他者からの評価を一切気にかけず、自身の公平さを信じているように思われる。正式に紹介もされずにウィンターボーンと言葉を交わしたというデイジーの話を聞いた伯母は、即座に野育ちという評価を下し、彼女に対して謁見の機会すら拒否する。因襲の世界に長い間身を置いてきた彼は、デイジーの行動様式がヨーロッパ社会の許容範囲を超えていると理解しながらも、その美貌と屈託の無さに新鮮な驚きを覚え、そこに繊細な気品を見出してさえいる。——"Common" she was, as Mrs. Costello had pronounced her; yet it was a wonder to Winterbourne that, with her commonness, she had a singularly delicate grace.

たった二度会っただけのウィンターボーンと、彼女はシヨン城へ二人きりで出かけることになるが、それは上流階級の価値観では考えられない暴挙であった。ウィンターボーンは若い男として降って沸いたような幸運を喜びながらも、コステロ夫人を始めとするヨーロッパのアメリカ人社会の規範を逸脱しているという後ろめたさを感じている。できるだけ秘密裡に出かけたいという彼の思いは見事に肩透かしを食らう。彼女は馬車の旅よりも多くの視線に晒される危険性のある汽船での遠出を望む。——Winterbourne's preference had been that they should be conveyed to Chillon in a carriage; but she expressed a lively wish to go in the little steamer; she declared that she had a passion for steamboats. There was always such a lovely breeze upon the water, and you saw such lots of people.——むしろ汽船の中で、多くの人を見る機会を楽しもうとする。これは正に、子供の頃ミシシッピー河の雄大な流れの中で、行き来する蒸気船から人生を学んだと言っているマーク・トウェインに代表される、アメリカ人の大いなる好奇心の表れであろう。

——'In that brief, sharp schooling, I got personally and familiarly acquainted with about all the different types of human nature.' (6) ——彼女は、その汽船の中で、他人からの奇異な視線に少しも動ずることなく、自分の好奇心の赴くままに、その印象をウィンターボーン相手にしゃべり続ける。その率直な様子に彼は彼女の気品を見出し、満足感を覚えたのだった。

遠出の最初は「客観的な」会話に専心していたデイジーだが、だんだん「主観的」色合いが濃くなりウィンターボーンにとっては雲行きが変化してくる。つまり、明日にもこの地を離れるという彼の個人的事情を聞いて、彼女はその行き先にいるはずの恋人の存在を若い女性らしい想像力で探り当て、嫉妬めいた言葉を執拗に繰り返し、相手を辟易させるのだ。そして、半ば強引に次の自分の滞在先ローマに訪ねて来るようにとの約束を強要する。ウィンターボーンは、アメリカ娘の一例を観察でもしてやろうと、さながら芸術作品でも鑑賞するような余裕のある視線をデイジーに向けていた。だが、相手は当然のことながら固有の感情を持った人間であり、人間としての普通のコミュニケーションを望んでいる。二人の関係性の高低にお互いの認識の齟齬が生じている。ウィンターボーンの視点から彼女を見ている読者も同様に、デイジーという娘を評価してやろうという傲慢な想いを抱いてしまっている。それゆえ、デイジーの自分への個人的興味に対して理不尽な非難と感じてしまうウィンターボーンに共感するのである。——...James's skillful complication of the conflict, his dialectical inquiry, or at least what has been called his "middle point of view". The key to any sophisticated reading along the line James intended is to focus as well on Winterbourne, since his is our point of view, whereas Daisy remains, as she should, the "phenomenon" into whose consciousness we are not permitted to enter, yet whose continual and insubstantial "chatter" and love of a "fuss" qualify her stature otherwise as free spirit and genuine expression of nature opposed to artificial forms of respectability. *Both* Winterbourne and Daisy are in James's language "queer mixtures" of contradictory elements and "booked to make a mistake" with each other because the reactions of each to the other are culturally and socially predetermined. (7) ——ウィンターボーンの視点を保持することで、デイジーという存在は生身の人間から一つの現象としてしか意識されなくなってくる。こういった状況下では、お互いの間に誤解が生じることは必至であり、人間同士の意志の疎通は成立し難くなるのである。

Ⅲ. 亀　裂

夏のション城行きから冬のローマでの再会までの数ヶ月間に、ウィンターボーンのデイジーに対する想いは募る。語り手であるウィンターボーン自身はそれに気づいていないふりをしているが、デイジーが自分との再会をたおやかに心待ちにしている様を折に触れ夢想してきたという彼自身の告白に、読者は彼の期待を読み取ってしまう。だが、いざデイジー一家の滞在するローマへ向かおうという時に、先に現地に滞在しているコステロ夫人からの手紙で、デイジーが元気にイタリアの男たちと遊び歩いているという情報を得、内心穏やかではいられない。

実際に再会したデイジーは、ジョバネーリというイタリアの美男子を引き連れローマの町を歩き回って、当地の人々の失笑の的となっていた。監督者である母親は、そんな娘を窘めるでもなく甚だ頼りない。社交界の年長者からの忠告に対しても全く動じない様子に、デイジーは段々と社交界から締め出されていく。ウィンターボーンは冷静な中立者を装っているが、その実、デイジーの行動の一つ一つに気を揉み、彼女の気持ちを忖度しては一喜一憂させられている。

登場人物の視点から描かれているジェームズの特徴的な興味深い箇所がある。

By this time Daisy had turned her attention again to Winterbourne. "I've been telling Mrs. Walker how mean you were!" the young girl announced.

"And what is the evidence you have offered?" asked Winterbourne, rather annoyed at Miss Miller's want of appreciation of the zeal of an admirer who on his way down to Rome had stopped neither at Bologna nor at Florence, simply because of a certain sentimental impatience. He remembered that a cynical compatriot had once told him that American women---the pretty ones, and this gave a largeness to the axiom---were at once the most exacting in the world and the least endowed with a sense of indebtedness.

ウォーカー夫人宅の再会の場で、デイジーは漸く会えたウィンターボーンとは親しげではあるものの簡単な挨拶のみで、ウォーカー夫人と熱心に話を始めてしまう。取り残された感のあるウィンターボーンは、同行したデイジーの母親の長話に捕まってしまうが、デイジーの様子が気になり、延々と続く母親の話にはまるで上の空である。やっとデイジーがウィンターボーンに眼を向けたかと思うと、ローマに到着しても真っ先に自分に会いに来ない彼を相手に公然と絡み始める。彼はずっと心でデイジーを気にかけていたという思いがあるので、相手の言動に憤りを覚える。ひっそりと自分を恋しく待っているだろうと想像していた乙女とはあまりにも懸け離れたデイジーの現実の姿に一人失望感を味わっている。それでも、彼は自分の一人相撲の現実は認めない。アメリカの娘というものはかように恩知らずの我儘なものなのだ、と一般化して嘆いてみせることで鷹揚さを取り繕っている。実は、会いたかったのは彼自身で、自分との再会を相手に可憐に歓喜して欲しいという、自分の描いていた展開にならなかったことに腹立たしさを覚え、彼は内なる心で相手を責めている。人間というものはこのように、自分の都合の良い解釈をし、また、自分の本心を自分自身にさえ明かさない存在なのである。

この箇所の改訂版は以下の通り、ウィンターボーンの一人相撲の様子がより明確に説明されている。

By this time Daisy had turned her attention again to Winterbourne, <u>but in quite the same free form</u>. "I've been telling Mrs. Walker how mean you were!"

"And what's the evidence you've offered?" <u>he asked, a trifle disconcerted, for all his superior gallantry, by her inadequate measure</u> of the zeal of an admirer who on his way down to Rome had stopped neither at Bologna nor at Florence, simply because of a certain <u>sweet appeal to his fond fancy, not to say to his finest curiosity</u>. He remembered how a

cynical compatriot had once told him that American women---the pretty ones, and this gave a largeness to the axiom---were at once the most exacting in the world and the least endowed with a sense of indebtedness.

公然と「酷い人」呼ばわりされたこと、しかもその打ち解けた口調がウォーカー夫人に対するものと全く同じだったことに傷ついているのである。もっと密やかな個人的な親しみをウィンターボーンは期待していたのだ。皮肉の一つも言いたくなる真情を吐露していることで、彼は自分の恋心を暴露してしまっている。

ウィンターボーンは、デイジーの心が全く分からず、彼女に翻弄される思いがしているが、デイジー側も同様にウィンターボーンの気持ちが分かっていない。お互いの意志の疎通が閉ざされている状態である。両者間に見られるこの意識の断絶は、彼ら二人だけに留まらず、登場人物たち全ての相互関係に一様に見受けられる。ウィンターボーンとミラー夫人、ウォーカー夫人とミラー夫人。そして、親密に思われるデイジーとジョバネーリの間においても。デイジーにとってジョバネーリとの付き合いは異国の娯楽に過ぎないが、ジョバネーリ側はもっと真剣である。デイジーは無邪気であるが同時に残酷でもある。それぞれが自分の思惑の視点で相手を把握し、そのありのままの姿ではなく自分の思い通りの存在として把握し、相手の心を制御しようとさえしている。しかし、そういう現実を一人一人が自覚することはほとんどない。そこから、誤解が生じ、積み重なって断絶へと繋がっていくのである。——Her blindness to the nature of the American colony is equalled by her blindness to Winterbourne and Giovanelli as individuals. While Winterbourne fails to "read" her "riddle" rightly, she fails to "read" his. She feels his disapproval in Rome, but she is not aware of his affection for her. Neither does she reveal any adequate perception of her impact on Giovanelli. To Daisy, going about with Mr. Giovanelli is very good fun. Giovanelli's feelings, we learn at the end, have been much more seriously involved. (8)

Ⅳ. 崩　壊

Winterbourne stopped, with a sort of horror, and, it must be added, with a sort of relief. It was as if a sudden illumination had been flashed upon the ambiguity of Daisy's behavior, and the riddle had become easy to read. She was a young lady whom a gentleman need no longer be at pains to respect.

夜中のコロシアムに、ジョバネーリと二人きりでいるデイジーの姿を目撃したウィンターボーンは、憤怒を禁じえない。正常心を保てないほどの嫉妬心の存在を自分では認めず、これでデイジーの身持ちの悪さが確定したとばかりに、彼女の本性をついに見抜いたと決め込むのだった。——"Why, it was Mr. Winterbourne! He saw me, and he cuts me!" ——ウィンターボーンの顔は強張り、その目はデイジーを憎悪の眼差しで射抜いている。その強烈な嫌悪は確実にデイジーに

伝わっている。もはや彼女の声もウィンターボーンの心に喜びをもたらすことはない。専ら彼女の不品行を糾弾する思いに圧倒されている。——What a clever little reprobate she was, and how smartly she played at injured innocence!——彼女の innocence は穢れ、彼女は単に放埒なアメリカ娘にしかすぎない。自分が正当化してやる必要など無いのである。

改訂版では、以下のように説明の文言が付け加えられている。

Winterbourne felt himself pulled up with final horror now---and, it must be added, with final relief. It was as if a sudden clearance had taken place in the ambiguity of the poor girl's appearances and the whole riddle of her contradictions had grown easy to read. She was a young lady about the *shades* of whose perversity a foolish puzzled gentleman need no longer trouble his head or his heart.

いよいよこれが「最後の」判定であると、明確に 'final' の文字が繰り返されている。そこには恐怖感と安堵感が入り混じっていた。つまり、デイジーに最終的に見切りをつけることに対しての恐れと共に、自分自身の内面の現実から逃避できる安堵感がある。改訂前には、単に「紳士」だが、ここでは、「愚かな、迷える紳士」と暗に自分のことを自嘲気味に貶めることで、実は、相手のことを捨てている。

"I was bound to see the Colosseum by moonlight. I shouldn't have wanted to go home without that;.... "Well, I *have* seen the Colosseum by moonlight!" she exclaimed. "That's one good thing." ——デイジーはただ無邪気な好奇心から、異国の地で興味の持てることは何でも体験してみたいという思いで、他人の視線や思惑、道徳的規範など全く意に介さない。あまりにも無防備な彼女は、当地社会の常識から逸脱しているゆえに結局は破滅していく。この上も無い美しさで周りの男たちを魅了したデイジーだか、その美貌と服装の完璧さと生き生きとした会話が言及される一方、生身の人間としての具体的な描写は省略されているので、作品中のデイジーという存在は意外にも希薄感が漂う。彼女の死後には、全くの無垢だけが存在していたかのようだ。——"My supposedly typical little figure was of course pure poetry, and had never been anything else; (9) —— クレインの美しい娘マギーが、スラムという生々しい現実感の中で、結局は売春婦にまで堕落していくにも拘わらず、妙にその存在が希薄だったように、デイジーもお上品ぶる社交界という排他的な因襲の世界の中で、一人だけ際立つ不可解な無垢性を体現している。マギーが、集団の中から排除され、ひっそりと暗いハドソン河に呑み込まれていったように、あっけなく熱病で死去してしまったデイジーは、4月のデイジーの咲き乱れる土の中に埋没していく——he stood staring at the raw protuberance among the April daisies. ——ことを考えると、デイジーの存在も、ある意味では象徴的なものと見ることができる。彼女の存在を通して、私たちはウィンターボーンという人物の心の動きを追体験することができ、同時に彼女を取り巻く他の人たちの動向をも察知できるのである。——James deliberately isolates Daisy as a person, which serves both to intensify her social freedom as an American, and her vulnerability as sign. (10)

——デイジーの死はジェームズにとって必然であったようだ。——To be sure, James tries to make Daisy's death inevitable. (11)

V. 結 論

ウィンターボーンの眼を通してみてきたデイジーという人物像は、公平な進歩主義者に思えることもあれば、単なる自堕落な田舎娘に見えることもあるというように、全く一貫性がない。結局その曖昧模糊とした印象のまま彼女はこの世を去っていく。ウィンターボーン自身のその時々の感情の反映された像として作品の中で存在していた彼女の視点は全く顧みられず、彼女の心情を私たちは結局知ることはできないまま終わる。自分の軽率な行動から熱病に罹って死亡したデイジーは、実はヨーロッパ社会の同国人集団の中でもう既に抹殺されていた。至って善良な人間であるにも拘わらず、異分子として大勢から弾劾されたことへの反発で周囲との軋轢を却って深めてしまう、悪循環の典型とも考えられる。——more truly a victim of the cowardly and petty incosiderateness of public opinion. Daisy typifies those hasty and choleric but generous and good people whose first impulse, in quick reply to the sting and bruise of a cynical public's false accusation, is to continue, in a flagrantly exaggerated form, the conduct for which they have been criticized. (12) 周囲からの非難が更なる新たな非難行動を誘発してしまい、結果としてその当人は排除される事態となる。

個人は様々な遭遇の機会から他者を値踏みしているが、その評価は少しも真実ではなく、個人自身の限られた視野の産物に過ぎないという、一個人が他者を判断するときの限界がここに示されている。人間は感情の生き物であるから、当然個人の持つ見解は常にその当事者の感情に左右されている。ウィンターボーンはその二つの眼で目前の事実をしっかりと見据え、冷静に解釈している姿勢を装っているが、実は、彼個人の限られた感情的な心象の風景を目の当たりにしているだけである。その事実を私たちは日常の中でどうしても忘れがちなのである。そして、目の当たりしている対象が、自分と同様に感情を持った人間であるという事実、相手のことを理解しようとする過程が自分自身の感情のまな板の上で行われているに過ぎないということを失念してしまう。相手の言動や行動から対象者の人物像を結んでいく過程で、私たちは沢山の誤解を形成していく。一個人がそれまでの環境で形成してきた価値観から完全に自由になることは不可能なのである。

Mrs. Lynn Linton というロンドンの友人に宛てて書いた手紙の中で、作家はデイジーの無垢さについて擁護している。——The keynote of her *character* is her innocence---that of her *conduct* is, of course, that she has a little sentiment about Winterbourne, that she believes to be quite unreciprocated---conscious as she was only of his protesting attitude. (13) ——デイジーはウィンターボーンに対してほのかな恋心を感じてはいるが、嫉妬させるためにジョバネーリと親しげに振舞うなどということなど考えもしない、ただ無垢な存在として意図されたという。無知と紙一重の無垢さ。同国人の集団からのあからさまな自分への無視に対しても、自分からは悪意をそこに見出さないという、純粋さである。——In his moment of insight into her character,

James saw what more superficial observers always overlook, the fact that there were depths there, unsounded, unappreciated, which, had they been given encouragement, would have made her an entirely different girl. He understood human nature.(14) ——私たちはデイジーに対峙する時、彼女を遍在的な未知の他者の象徴として捕らえてみるべきなのではないだろうか。自分にとって未知であるが興味ある相手に対する時に、私たちは主人公同様見事に翻弄されてしまい、その評価は実に不安定になるのである。

スティーブン・クレインは記者の目を通して作品を書き、その中で現実を見据えることの重要性を力説した。人間というものがいかに現実逃避をする存在かを、様々な極限状態における人間の実態を提示することで読者の目前に差し出した。一方ジェームズは、有閑階級の世界を描きながら、芸術であるべき文学を追求した生涯である。その両者には、ほぼ同時代を生きたということ以外に一見接点がないようだが、ジェームズは個人の視点に徹底的に拘った作品を生み出し、その中で「見る」という姿勢を強調している。前者は、直視に耐えない現実をとにかくありのままに見て把握することを説き、ジェームズは現実というものが個々人の視界という限界における心象に過ぎないことを私たちに伝えている。

皮肉にも作品の中で、ヨーロッパナイズされたアメリカ人たちから侮蔑されたジョバネーリが唯一の生粋のヨーロッパ人であった。——ironically the one *real* European of the story(15) ——その彼だけがデイジーの真の無垢を理解していたのである。しかし、デイジーの墓所で彼からその事実を聞かされたウィンターボーンには、もう心に大きな動揺は訪れない。ウィンターボーンにとってデイジーは既に通過済みの遺物となり、一瞬の心の痛痒は感じても、すぐにまた日常に回帰していく。結局彼は、デイジーを理解することはなく、最後に残るのは断絶のみである。象徴的存在のデイジー対してのみならず、ジョバネーリについても然りである。彼はデイジーに常に纏わりついて、彼女が熱病に罹る原因を作っておきながら、病床の彼女に対しては無視を決め込む計算高い不誠実な男として描かれているが、それもウィンターボーンの意識の産物に過ぎず、ジョバネーリの実像も実は曖昧なままなのである。そして、語り手ではないが作品の進行係として中心的存在であったウィンターボーンについてでさえ、具体的な情報は隠されて、その年齢さえも「27歳位」と不明瞭な表現である。ウィンターボーン自身本心は明かしていないのだから、彼もまたデイジー同様不確かな存在なのである。

...in the course of his story Winterbourne first expands his "vision" by his positive response to Daisy and then "retreats" from his enlarged horizon by rejecting her.(16) ——ウィンターボーンがデイジーについて理解する可能性を自ら拒絶してしまったように、私たちも自分の周囲の他者に対して心を閉じた体勢でいるのではないだろうか。私たちが他者を不可解に思い、その相手に対して一貫性の無い印象を抱いてしまうとき、私たちは自分の現実から逃げているのかもしれない可能性を考えてみるべきだろう。周囲の者の行動を自分との関連でしか解釈できず、外部の世界を自分の主観によって変化させてしまっている個人としての限界を少なくとも認識しているべきだ、ということをジェイムズは、その作品の中で私たちに教えてくれているのだろう。

I stood upon a high place,
And saw, below, many devils
Running, leaping,
And carousing in sin.
One looked up, grinning,
And said: "Comrade! Brother!" (17)

Notes:

1. Richard A. Hocks, *Henry James---A Study of the Short Fiction---* (Twayne Publishers, 1990), p.32.
2. Bruce R. McElderry, Jr., *Henry James* (Twayne Publishers, Inc., 1965), p.48.
3. 芦原和子『ヘンリー・ジェームズ素描』(北星堂書店, 1995), p.111.
4. テキストは、*Great Illustrated Classics*, TITAN EDITION, *Short Novels of Henry James* (Dodd, Mead & Company, 1961) を使用し、引用は全て同書からで、引用中の傍線は筆者によるものである。
5. もう一つのテキストは、Leon Edel,ed., *Henry James, Selected Fiction* (E.P. Dutton & Co., Inc.,1953) を使用し、引用は全て同書からで、引用中の傍線は筆者によるものである。
6. John Dougill, *The Writers of American Literature* (Macmillan Languagehouse, 1995), p.36.
7. Hocks, p.32～3.
8. Harold Bloom ed., *Henry James's Daisy Miller, The Turn of the Screw, and Other Tales* (Chelsea House Publishers, 1987), pp.29～30.
9. Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London* (J.B.Lippincott Company, 1962), p.312.
10. Elizabeth Allen, *A Woman's Place in the Novels of Henry James* (Macmillan Press, 1984), p.53.
11. Bloom, p.30
12. Osborn Andreas, *Henry James and the Expanding Horizon* (University of Washington Press, 1948), p.25.
13. McElderry, Jr., p.49.
14. Cornelia Pulsifer Kelley, *The Early Development of Henry James* (University of Illinois Press, 1965), pp.267～8.
15. Hocks, p.34.
16. Ibid.
17. Joseph Katz, ed., *The Complete Poems of Stephen Crane* (Cornell University Press, 1972), p.11.